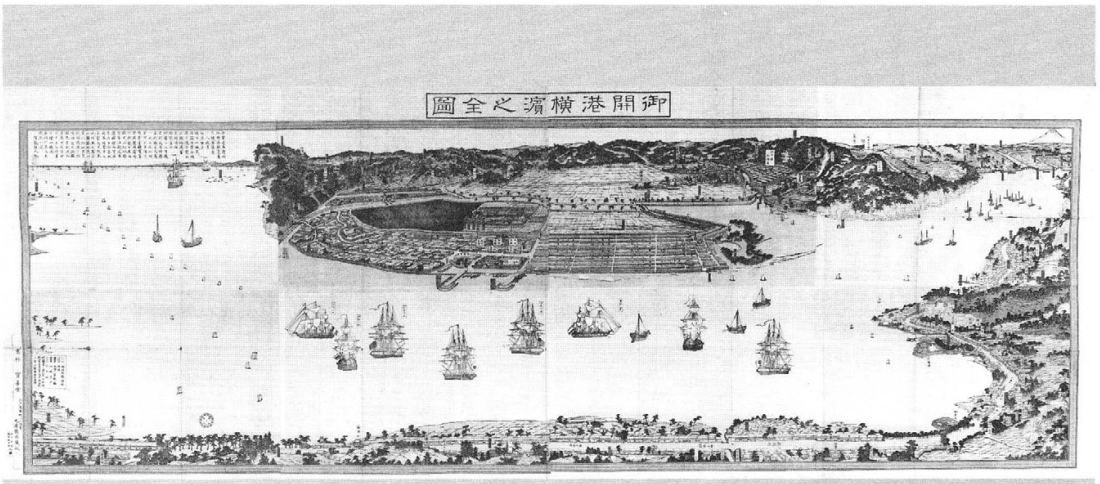
横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第56号

開港のひろば

Number 56

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）　横浜市中区日本大通3番地　〒231　電話（045）201-2100
発　行　日／平成9年4月23日（水）　印　　刷／中川印刷株式会社



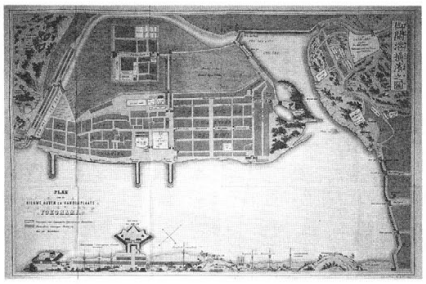
〔再版〕御開港横浜之全図

企　画　展

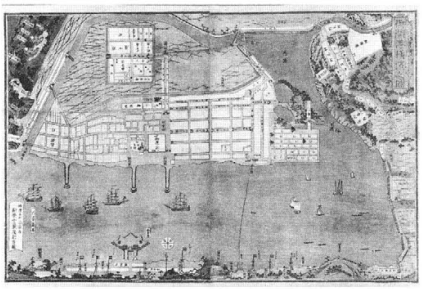
「横浜地図 ～港都横浜の生成発展を読む～」

再版『御開港横浜之全図』

五雲亭貞秀による『御開港横浜之全図（御開港横浜大絵図）』は、開港後の横浜を描いた一大鳥瞰図として知られている。初版、増補再刻を含めて三種が存在している。初版については万延元年（一八六〇）八月の刊行であることが明らかになっているが、おそらく開削直後の堀川を急遽描き入れたために外国人居留地の街割りが不自然になってしまっている。この拙速を正すため、堀川を元町寄りに移し、外国人居留地を改訂した「再版」を刊行し、併せてより詳細な『御開港横浜大絵図　二編外国人住宅図』を企画したのであろう。当館所蔵の再版の刊行時期は、太田陣屋に「酒井様御陣屋」と記されていることから、横浜警衛が越前藩から姫路・松代藩に交代した文久元年（一八六一）一〇月以降とすることができるが、文久元年九月架設とされる西の橋が描かれていないことから、改訂の内容は文久元年九月以前の景を描写しているものとみることができる。あるいは、再版の二刷以降に「越前様御陣屋」を「酒井様御陣屋」に書改めたのかもしれない。



石版『御開港横浜之図』



文久2年改訂の『御開港横浜之図』

「横浜地図～港都横浜の生成発展を読む～」

『御開港横浜之図』

「一川芳員写」「新栄堂東屋新吉蔵」板のものでこれも三種ある。『横浜市史稿』付図編所収のものが最も古く万延元年から文久元年の交の刊行。この版も太田陣屋に「越前様御陣屋」と記すものと「御陣屋」とだけ記すものとがある。これを元版としてオランダで石版に付されたのがホフマン著『横浜案内』J. Hoffmann, YOKOHAMA, 1862の付図である。元版とは海岸通り（バンド）が異なり、フランス波止場の位置に一本の突堤が図示されている。改訂版を元版としているのかも知れない。いまひとつは、フランス波止場の突堤、西の橋のほか、弁天の北側が大きく書き替られて役宅街になっているもの。「ヲランタコンシュル」とも記載されていることから文久二年（一八六二）の改訂とみてよい。

芳員『横浜明細全図』の原板

一川芳員画、師岡屋伊兵衛蔵版で「元治元甲子年原板　慶応四戊辰春再板」とあるが、これまで原板の存在を指摘されたことがない。芳員の地図では『御開港横浜之図』があるが、前述したように刊年が合わない。次にくる横浜全図は『御開港横浜正景 YOKOHAMA CHART』であるが、これも二種あり、当館所蔵の写図の題簽には「文久三亥年三月新刻横浜正景図」とある。いまひとつの『御開港横浜正景』は、袋題に「甲子新刻　横浜図会」とあることから、元治元年（一八六四）の刊になることが判明する。芳員画の記載はないが構図は『御開港横浜之図』と同じであり、今のところ『横浜明細全図』の原板に該当するのは『御開港横浜正景』しか見当らない。

明治三年一〇月

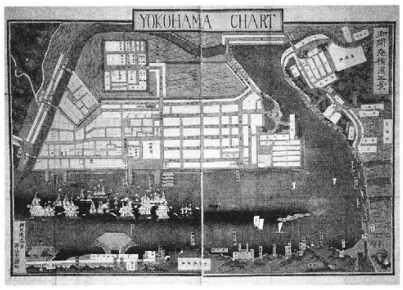
明治になって最初に刊行された横浜全図は、貞秀の『横浜明細之全図』、五葉舎万寿老人（尾崎冨五郎）の『新鐫横浜全図』と『改正新刻横浜案内絵図』であるが、それぞれ「明治三午年十月」「明治三年庚午十月官許」「明治三庚午秋」としている。松田緑山の『銅製新調横浜細見之図』も袋題に「明治三庚午歳季冬」とあり明治三年（一八七〇）に地理上の画期があったことを窺わせる。慶応四年（一八六八）の『大港横浜之図』や『横浜明細全図』と比べると、弁天の池や弁天の南方が埋立てられ、野毛浦の鉄道用地との間に橋（大江橋）が架けられている。この埋立により、関内各町の一丁目が端部でなくなり、従前の五丁目を一丁目とする丁目の付替えが実施されることになる（明治四年四月）。また、この期に横浜地図の刊行が集中するのは、灯明台役所（灯台寮）首長ブラントン指揮による実測図がイギリスで石版化され『横浜居留地地図 PLAN OF THE SETTLEMENT OF YOKOHAMA, JAPAN, 1870』として流布するに至ったことに刺激されたためもあろう。

尾崎冨五郎の横浜地図

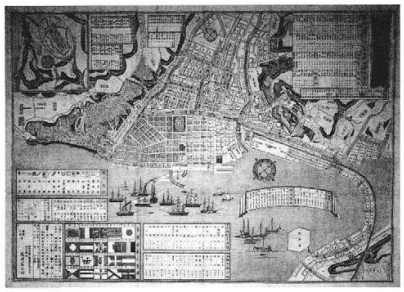
幕末期における横浜絵地図界の巨匠は貞秀と芳員であるが、芳員は『再刻横浜明細全図』（明治元年）をもって、貞秀も『横浜弐覧之真景』（明治四年）と『横浜明細之全図（改訂版）』（明治六年）をもって姿を消し、貞秀に取って代るかのように登場してくる五葉舎万寿老人事尾崎冨五郎の独壇場となる。明治二〇年代までの明治前期はいわば横浜絵地図の隆盛期になり、尾崎冨五郎以外にも横浜絵地図を刊行する者がでてくるが、いずれも尾崎冨五郎の絵地図をベースにしてアレンジを加えたものにすぎない。

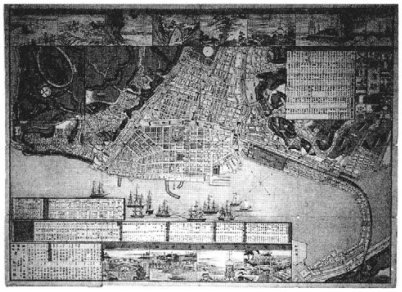
尾崎冨五郎の絵地図の発刊意図は比較的明白で各種の縮尺地図を揃えることにあったようである。いちばんの大判は『新鐫横浜全図』で「八分ヲ以テ一町トス」とあることから縮尺は四五〇〇分の一、『改正新刻横浜案内絵図』（明治三年）は「六分一町」で縮尺六〇〇〇分の一、『再版横浜案内絵図』（明治七年頃）は「七分一町」、『改正横浜分見地図』（明治一一年）は「五分一丁」で縮尺七二〇〇分の一、最小判は『改正銅版横浜地図』（明治一二年）になり、「三分一丁」で縮尺は一二〇〇分の一、B三判に当時の横浜をほぼ収める。「三分一丁」では表現が細かくなることから従前の「木版」を「銅版」に改める。

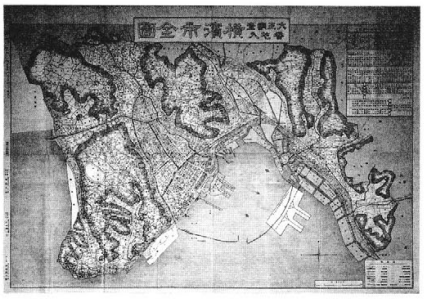
尾崎冨五郎は、明治一六年（一八八三）名所図入り地図を試みるが、銅版画家を調達できなかったようで果せず（『名所真景横浜地図』がこれにあたるが、名所図は付いていない）、



元治元年刊『御開港横浜正景』


尾崎冨五郎『改正銅版横浜地図』


歌川国鶴『絵入名所横浜新図』



有隣堂『昭和実測大横浜市全図』

有隣堂『大正調査番地入横浜市全図』

明治二〇年（一八八七）自ら筆をとって名所図入りの『改良横浜明細全図』を、明治二三年その普及版ともいえる『改良横浜全図』を刊行し、明治二四年には、貞秀の墨みに倣ったものか『横浜真景一覧図会』をだして横浜地図遍歴のしめくくりとする。

名所図入り横浜地図

明治一〇年代後半から二〇年代一杯まで流行した名所図入り横浜地図の最初は、安田安五郎の『改正横浜全図』（明治一五年一月一〇日御届）と歌川国鶴の『絵入名所横浜新図』（明治一五年一月御届）である。前者は東京で刊行されたためか、名所図九図中三図が東京の名所図になっている。ベースの地図は四五度ふっているが尾崎冨五郎の『改正横浜分見地図』を使用している。後者はベースに尾崎冨五郎の『改正銅版横浜地図』を使用、名所図一二図は国鶴自らの「図画」ということになる。前者の改訂版は確認されていないが、後者は明治二〇年代に東京者に版権を譲渡したようで、「著作兼発行者杉浦留吉　彫刻兼印刷者山中善三郎」により『絵入名所改正横浜新図』として刊行されていく。横浜者では、尾崎冨五郎が『改良横浜明細全図』『改良横浜全図』の名所図入り地図を刊行したほか、伊勢佐木町の書肆倉田屋（倉田太一郎）が『絵入名所横浜新図』の名所図を総入替えした『新撰横浜全図』を、同じく伊勢佐木町の書肆文魁堂（渡辺文五郎）が一部名所図を差替えた『改正名所絵入横浜新図』（明治二九年）を刊行している。

遠藤測量事務所の横浜市全図

明治三〇年代に入ると、写真の普及、名所絵葉書の登場によって、名所図入り横浜絵地図が衰退し、実測図に近い地図が求められるようになる。口火をきったのが鈴木陌三郎編輯の『改正横浜市全図』（明治三〇年）。発行者は伊勢佐木町松泉堂書店の鈴木安三郎で、七版まで訂正増補を重ねたところで明治三四年（一九〇一）の市域拡張となって絶版になったようである。

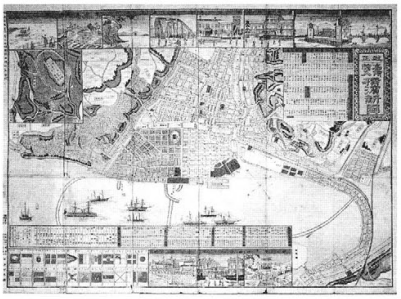
市域拡張後の明治三四年一一月には三地図が競いあうようにでる。吉本光太郎編、倉田屋書店発行の『拡張横浜市全図』、遠藤博愛・江口重太郎編、遠藤測量事務所発行の『拡張改正横浜市全図』、菅村孝三郎著、福岡新三（東京）発行の『市区改正横浜実測新図』で、このうち版を重ねるのが伊勢佐木町の書肆弘文堂菅村孝三郎の地図になる。明治四四年（一九一一）、菅村・福岡のコンビは『実地踏査横浜市全図』を刊行するが、この地図の製図者は「横浜測量協会　主幹遠藤博愛　会員中村隆貫」となっており、英文タイトルからみると『拡張改正横浜市全図』の継承版を意図しているようにみうけられる。

遠藤・中村のコンビは、明治四四年の第二次市域拡張に対応して縮尺八〇〇〇分一の『最新調査番地記入横浜大地図』を編纂するとともに、『実地踏査横浜市全図』の改訂（『横浜市全図番地記入』）にあたるなど（中村隆貫は鈴木金輔の『横浜明細新図』の再訂にもあたっている）横浜地図界に大きな足跡を遺したが、大正期にはいるとプッツリ消息が途絶えてしまう。

大正期の横浜地図

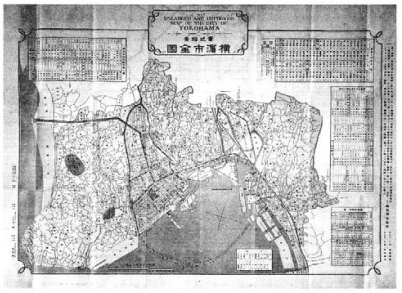
大正期最初の横浜全図は、大正二年（一九一三）の勧業共進会に合わせて刊行された『最新横浜市全図』で「横浜市案内」を付す（この地図は大正三年一月一日の『横浜貿易新報』の付録になる）。大正期横浜地図のベストセラーとなる有隣堂発行の『大正調査番地入横浜全図』も勧業共進会を契機とし、荻田春風堂発行の『最新調査番地入横浜新地図』と大正期横浜地図を二分する。両者のベース地図は同一のもので、後者は「町名いろは引早見」に特徴をもたす。ともに、一五〇〇〇分一スケールで、縦五五センチ横八〇センチの大きさに市域拡張（明治四四年）後の横浜市を収める。前者の『大正調査番地入』は、『昭和調査番地入』と表題を変えながら昭和三年（一九二八）の第四八版までの刊行が確認されているが、昭和二年の市域拡張により全面改訂を余儀なくされ、昭和四年には『改正番地入昭和実測大横浜市全図』となる。以降二五〇〇〇分一スケールが横浜市全図の定型となるが、昭和一四年（一九三九）の市域拡張後は三七〇〇〇スケールでも同サイズの用紙には収まりきらず、最早「番地入全図」は一枚刷では不可能になる。

（堀　勇良）



渡辺文五郎『改正名所絵入横浜新図』

鈴木陌三郎『改正横浜市全図』



遠藤・中村『実地踏査横浜市全図』

横浜人物小誌 42

居留地の「古老」イギリス人キングドン

N・P・キングドン（Nicholas Phillipps Kingdon）は、その創草期より横浜居留地で活躍した居留民のひとりである。

一八二九年にロンドンに生まれたキングドンは、一〇代後半にはすでにメキシコに渡って鉱山の仕事についていた。やがて六一年にメキシコから中国にわたり、さらに六三年にデント商会（Dent & Co.）の代理人として上海から開港間もない新天地、横浜へとやってきたのである。

このデント商会とは、当時の極東において、ジャーディン・マセソン商会と並ぶイギリスの大商会であった。しかし横浜での同商会の活動はうまくいかなかったようで、六六年頃に撤退した。独立を余儀なくされたキングドンは、七〇年にキングドン・アンド・シュワーブ商会(Kingdon, Schwabe and Co.) を設立した。同商会はその後、生糸輸出を中心に茶、米などさまざまな品物を扱う横浜でも上位の商会となっていった。

また私生活では、浮世絵師の初代歌川国鶴の娘、ムラと結婚して、家庭を築き、通算四〇年の長きにわたって横浜に暮らした。明治期、新聞の挿し絵画家として活躍した歌川国松とは義理の兄弟となる。

四〇年間の在日のようすは、現存するイギリスの家族に宛てた約三〇〇通の書簡に克明に記されており、その一部は歌川隆翻訳「N・P・キングドン書簡（日本在住時）」（『横浜開港資料館紀要』十四号）で紹介されている。

初期居留地社会のリーダー

人々が世界各地から集まり、生活の場となってくると、居留地にはさまざまな問題が生じてきた。その中でも特に問題となったのが衛生問題であった。

キングドンは六四年から自治組織の衛生委員会Sanitary Committeeの一員に任命されて居留地内の衛生問題の改善につとめるようになった。翌六五年には、居留民の自治機関である市参事会Municipal Council が設立され、あらたに衛生・道路委員会Sanitary and Road Committee委員に選出された。この衛生・道路委員会の職務は「居留地内の道路および下水道などを構築・修理し、参事会により委任された居留地内の衛生関係の改善につとめること」（『横浜市史』二巻）とされ、キングドンをはじめとして五名の居留民がこの任にあたることになった。その精力的な活動が招いてしまったトラブルをワーグマンが『ジャパン・パンチ』に掲載しているので紹介しよう。

『ジャパン・パンチ』65年12月号

「市参事会条令第四号違反」と題するこの風刺絵の登場人物は、左が違反者のベアト（幕末の貴重な記録写真をのこしたことで知られる写真家）、真ん中がこれを咎めるキングドン、右端は他の衛生・道路委員であろう。同条令第一条の「公道上は建築資材またはその他の妨害物をおくために使用しまたは占有してはならない」（『横浜市史』二巻）という規定に違反したベアトに向かってキングドンらが条令を楯に石材を退けるように命令したところ、ベアトは市参事会のことは知らされていないと言って、抵抗している場面である。自治組織であったため、その職務遂行はたいへんだったようだ。

書簡中にこの多忙な活動をつづったつぎのような箇所がある。「領事［ポルトガル代理領事］の仕事や皆から押しつけられた他の公共の仕事で考えられないほど時間を取られます。例えば私は清掃［衛生］委員会の委員長を一四か月もやっていて、雨期と暑い季節がやってくるというのに、毎日見回りに出かけなければなりません。その上、消防委員会の委員長をはじめ居留地のあらゆる会議でだいたい議長を務めます。この会議も増えてきたので市参事会の設立を考えています。」（六五年四月一三日付）

やがて市参事会は運営資金不足などが原因となり、六七年には機能を停止してしまった。

競馬に熱中したディオゲネス

ディオゲネスとは古代ギリシャの哲学者で、粗衣粗食で、たるの中に住み奇行に富んだ人物だったという。キングドンはそのディオゲネスにたとえられて、しばしば競馬との関わりで『ジャパン・パンチ』に登場してくる。無類の競馬好きで、馬も所有していた。「横浜秋季競馬会、ディオゲネスおおいに興奮する！」と題されたこの絵は、社交の場でもあった根岸の競馬場（現在の根岸森林公園）の秋の賑わい、中でもとびぬけて興奮しているキングドンの姿を伝えていて楽しい。

『ジャパン・パンチ』72年3月号

書簡にも、競馬の話がよく出てくる。「丁度競馬が終わったところです。私が日本の名士達をレース・クラブに紹介して彼らが自分達のレースを一組入れるのを手伝いました。今度は要請により二、三日中にミカドの厩舎に行きます。実は、私が世話するべく私のところに送られてきた馬は、ミカドの馬だということです。」（七五年一一月一五日付）

キングドンは一九〇三年に七五歳で死亡し、山手の外国人墓地に葬られた。

（中武香奈美）

「土地宝典」について

明治前期から昭和期にかけて、「土地宝典」と呼ばれる市町村単位（一部区単位）の地図帳が、神奈川県を中心として全国各地で刊行された。

大羅陽一氏によれば、「土地宝典」とは登記所および市町村役場に備えられた公図と土地台帳の記載項目（地番・地積・地目・地価・等級・所有者名・住所など）を地図と表に編集し直し、個人または出版社が刊行したものである（「土地宝典の作成経緯とその資料的有効性」『歴史地理学』一三七号）。

また、大羅氏は発行時期が、明治前期、明治末期から大正前期、昭和初期から第二次大戦中、第二次大戦以降の四つの時期に集中していると指摘している（昭和一九年末から同二〇年にかけては、軍の命令により発行が中止）。

そして、発行が集中した理由を、明治前期に発行されたものは私的土地所有権の確立に伴う地主層の必要性、明治末期から大正前期のものは郡部編入・市域拡張などの行政区画変更、昭和初期から第二次大戦中のものは小作争議や土地所有の移動と関東大震災による土地状況の紊乱、そして第二次大戦以降のものは農地改革および大都市周辺の開発などによるとしている。

加えて、神奈川県では他の地域に比べ発行期間が長く、出版社も多いと述べている。

以下、横浜のものについてみてみたい。当館では左下の表にあげた複製が閲覧室の開架書架にあり、閲覧・複写とも可能である。

①は、明治八（一八七五）年の地図を原本とし、更に改良・修正を加えたものである。記載項目は、地所の等級・番号・坪数である。

②は、明治二二年の横浜市政施行と、明治三四年の第一次市域拡張をうけて発行された。記載項目は、地番・等級・坪数等である。

③は、明治四四年の横浜市の第二次市域拡張にともない、鉄道電車線路並に道路が拡張し、地目が甚だしく変換するため発行された。記載項目は、町字・地番・地目・坪数・等級・地価・所有者名等である。

横浜市では、関東大震災による災害地の区画整理を実施した。④から⑧の『横浜市土地宝典』は、一連の区画整理をきっかけに昭和五年から昭和七年にかけて発行された。その際の原図は、大部分横浜市所蔵の所謂公図を謄写したものだが、区画整理地外の部分は公図そのものが大震火災後に従来の「土地宝典」もしくは旧図等を参酌したものとなっている。記載項目は、町名・丁目・字・地目・坪数・地価・等級・所有者名等である。

以上、「土地宝典」の発行の経緯と記載項目をみたが、資料としてはどのような価値があるだろうか。前掲の大羅氏は、「土地宝典」は市町村単位で公図と土地台帳をほぼ一冊にコンパクトにまとめていること、随時改訂される公図とは違い作成時の土地の地番・地目・所有者・地価などの状況がわかること、同一地域において、公図の新調に合わせて刊行がくり返される例が多く、それらを対比させることで地域の土地の地番・所有者・地価などの変遷過程が把握できることなどを指摘している。

たとえば、南仲通一丁目を例にとると、昭和五年発行のものは区画整理によって、それまでの一番から一九番までの地番に変わって一番から一四番までの新しい地番がつけられている。

また、大正五年以降に発行されたものは従来のものと異なり、地番の入った地図と土地台帳が別に記載され、土地の所有者がわかるようになった。それにより、所有者が大正五年から昭和五年にかけてかなり移動しているのがうかがわれる。この区画では、左右田銀行の頭取であった左右田喜一郎が、大正五年には約二一三坪の土地を所有していた。その後左右田銀行は横浜興信銀行に吸収合併され、この土地は昭和五年には横浜地所株式会社のものになっている。

大正五年は、大正三年に始まった第一次世界大戦の影響で、好景気の時期であったが、大正九年頃より不景気となった。地価をみると、大正五年に比べ、昭和五年には下落しているのがわかる。大正五年に一六番にあった第三銀行の地所の坪単価を比較すると、約一二円低くなっている。このことは、景気の好不況によるものと思われ、「土地宝典」の記載事項から社会情勢をうかがうことも可能である。

記載された文字がかなり小さいのが難点だが、「土地宝典」を詳細に検討することにより、発行された当時の横浜の景観や社会状況を再現することができると思われる。

（上田由美）

当館所蔵横浜関係「土地宝典」一覧

	資料名	編者等	出版地	出版者	出版年	請求記号
①	横浜全図（実測横浜区全図）	市川澂・真木千代蔵編	東京	北畠茂兵衛ほか	明治17(1884)	291.37/16C
②	土地宝典横浜市街全図	田村七五三吉編	横浜	南中舎	明治39(1906)	334.6/2C/M39
③	横浜市土地宝典	藤木官一編	横浜	藤木測量事務所	大正5(1916)	334.6/3C/T5.1-T5.4
④	横浜市土地宝典 第1巻 中区之部	吉川菊蔵編	横浜	横浜土地協会	昭和5(1930)	334.6/1C/S5.1-S5.3
⑤	横浜市土地宝典 磯子区之部	横浜土地協会監修	川崎	日本全国地図刊行会神奈川県出張所	昭和6(1931)	334.6/1C/S6.1
⑥	横浜市土地宝典 保土ケ谷区之部	横浜土地協会監修	川崎	日本全国地図刊行会神奈川県出張所	昭和6(1931)	334.6/1C/S6.2
⑦	横浜市土地宝典 神奈川区之部	横浜土地協会監修	川崎	日本全国地図刊行会神奈川県出張所	昭和7(1932)	334.6/1C/S7.1-S7.3
⑧	横浜市土地宝典 鶴見区之部	横浜土地協会監修	川崎	日本全国地図刊行会神奈川県出張所	昭和7(1932)	334.6/1C/S7.4

資料
よもやま話

港北区綱島台 飯田家邸内の
成島柳北碑

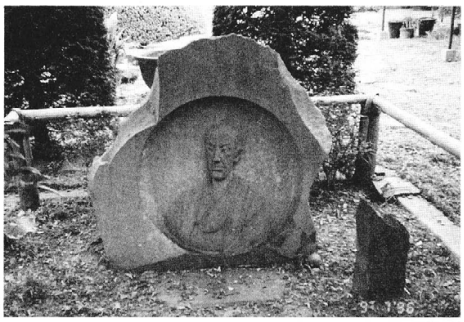
市内港北区綱島台の飯田助知家に成島柳北の石碑がある（写真下）。飯田家は、江戸期を通じて橘樹郡北綱島村の代々名主、幕末に綱島寄場組合大総代を勤め、明治期以降は政治活動のほか、養蚕や製茶・製氷、果樹栽培、農会や青年団活動、耕地整理や河川改修など地域振興に尽くした。江戸後期建造の長屋門（表門）と明治二二年の主屋は、平成六年に横浜市指定有形文化財となったが、その後、現当主の十四代助知氏によって茅屋根の葺替えや長屋門の修復、周濠の整備工事が行われ、往時の開拓名主を彷彿させる土豪的屋敷構えが再現された。現在、土・日曜日に限り、事前に飯田家の了解を求めれば、見学も可能となっている。

石碑は、長屋門を入った中庭の右手、一メートル大の平石に、円窓に着物姿の上半身を浮彫りした肖像である。露出部分に碑文や石工・建立者等の刻字はない。手前の石柱に、「柳北翁之像」とある。

本稿では、この飯田家の柳北碑にまつわる話題を綴ってみたい。

長命寺の柳北碑

柳北は、天保八年（一八三七）浅草御厩河岸に成島稼堂の子として生れ、二十歳で父の跡を襲って侍講、慶応二年（一八六六）正月、仏軍による三兵伝習に備える兵営築造責任者として、横浜の太田陣屋に赴任した。三年五月騎兵頭に進み、九月、最後の残留歩兵隊を率いて江戸に帰った。横浜時代、ビュラン、シャノワヌらと交遊、また早朝砲兵・歩兵の諸隊長と申し合わせ、隅田河畔の観花に木母寺まで遠乗りし、そのまま登営した日もあったという。来浜前、既に『柳橋新誌』初編を著した風流人であった。四年、外国奉行、ついで会計副総裁の要職に就くが、江戸開城の前日、職を辞して向島に隠棲、墨上魚史と称した。以後官途に就かず、東本願寺現如上人に随行して渡仏、「朝野新聞」社長、また『花月新誌』を創刊し在野の文筆家として活躍した。明治十七年（一八八四）十一月三十日、肺結核のため須崎村の自宅で死亡、本所本法寺の先塋に葬られたが、のち市区改正により雑司ケ谷墓地に改葬された。



飯田家の柳北碑

一周忌に共済五百名社（安田善次郎や柳北が設立した最初の生命保険会社）が追善会を催し、桜餅で有名な長命寺境内に碑を建てた。碑は、大震災や空襲の猛火を潜り抜けて同寺に現存するが、鼻は早く欠け落ちたようだ（写真次頁）。明治三十九年（一九〇六）の大町桂月『東京遊行記』に、「石面にほり出したる成島柳北の馬面あはれや鼻欲けたり」とある。上部に大内青巒の撰文、左下に「宮亀年刻」とある。飯田家の柳北碑も手法と構図は同じ、この長命寺の碑に倣ったのかも知れない。

飯田家の「小向梅園碑文」

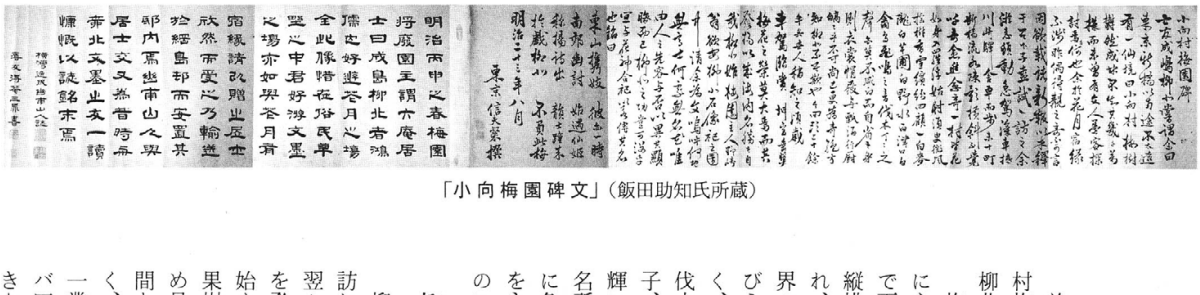
飯田家に「小向梅園碑文」と箱書された巻子がある（写真次頁上）。題簽に「成島柳北翁碑文　亡海山老愛什　助夫蔵」とあり、海山（十一代助太夫）の遺愛の品であった。

小向村梅園碑

亡友成島柳北嘗謂余曰
東京新橋以南途不太遠
有一仙境曰小向村梅樹
欝然成林不知其幾千万
株而未嘗有文人墨客探
討焉者何也余於花月宿縁
不浅昨偶得覯之奇不可言
因欲載諸新報以木鐸
于天下子蓋試一訪之余
游意頓動急駕汽車抵
川崎駅舎車而歩未十町
断橋流水疎影横斜不覚
吁奇愈進愈奇一村皆花
如身入羅浮姑射須臾微風
揺樹香雪繽紛四顧一白麦
隴白芋圃白野水白津口白
禽獣飛鳴之音伐木丁々之
聲亦莫不咸白而自省吾身
則衣装帽屐与瓢酒行厨
皓々乎不可尚已更為奇絶方
知柳北不吾欺也今回頭已十余
年矣世人稍知之頃歳
車駕臨賞　坤宮垂奬
梅花之栄莫大焉而其
発揚以成海内名勝者自
我柳北始梅園主人野崎
翁欲安柳北石像祀之園
中請余為文嗚呼何地
無高士何處無名花唯
由人之先容与否以異其顕
晦而已柳北之功豈可没乎
宜与花神合祀以永傳其名
也銘曰
　東山携妓　彼亦一時
　南郊幽討　始遇仙姫
　称揚詩出　韻士踵来
　於戯柳北　不負此梅
明治二十三年八月
　東京信夫粲撰

続いて、次の一文がある。

明治丙申之春梅園
将廃園主謂六庵居
士曰成島柳北者鴻
儒也好遊花月之場
全此像惜在俗民草
野之中君好游文墨
之場亦如與花月有
宿縁請改贈之居士
欣然而受之乃輸送
於綱島邨而安置其
邸内焉幽甫山人與
居士交又為昔時与



「小向梅園碑文」（飯田助知氏所蔵）

柳北文墨之友一読
慷慨以誌銘末焉
横濟逸民幽甫山人誌
辱友得庵三鼎書

前者は、信夫粲（如軒）撰の小向村梅園碑文、後者は、飯田家邸内の柳北碑由来記である。

梅園碑は、言う。柳北の強い奨めに心急き、小向村を訪ねる、川崎駅で下車、十町を歩まずして、梅枝が縦横に清流に映え、村中が花に包まれ、恰も唐国の梅の名所羅浮山、仙界の姑射山に来たようだ、微風が花びらを乱れ散らして辺り一面真っ白く、麦丘や芋畑、流水、鳥の鳴声や伐木の音さえ皆白く、私の衣服や帽子、履物、瓢の酒や弁当まで純白に輝いている、近年に行幸を得、梅の名所となるそもそもは、柳北の紹介に負う、梅園主人野崎某が、その功を永く伝えようと園中に石像を祀るのに併せ、一文を儒めたものだ、と。

柳北の「小向村探梅ノ記」

柳北が、津田仙に誘われ小向村を訪ねたのは、明治十三年二月四日。翌々六日の『朝野新聞』に探梅紀行を発表した（～八日）。江戸中期に始まる小向村の梅は、元々実を採る果樹として植えられたもの。そのため品種は一様で、花は単弁白色、夜間も「燈ヲ点ゼズシテ車ヲ挽ク可」く、「千百株一叢ヲ為シ一叢尽キテ一叢出デ千重万層…其ノ中央ニ到レバ四顧尽ク梅ナリ」とその規模の大きさを激賞した。これを機に、毎春文人墨客の来遊する者多く、茶店もでき、柳北もしばしば足を運んだ。十七年三月十九日付『朝野新聞』に再び「小向村観梅記」を載せた。当時、梅園は四区に分れ、第一・四区は野崎、二区高橋、三区榎本各氏の経営になり、就中四区は老幹新枝相交りて趣深く、林間に酒楼ありと伝える。同日、天皇が騎馬で蒲田村梅屋敷を経て小向村梅林へ行幸した。

同・部分

長命寺の柳北碑

園主榎本久左衛門は、これに因んで「行幸廼（みゆきの）梅林」と改めたという。また、二十二年の村制施行時には、御幸（みゆき）村を称し、今日に幸区の区名を残す。

飯田家の柳北碑

梅の名所として有名になる一方、農家の余業に実を結ばぬ老梅を丹精し、経営を続けるのは困難になったようだ。幽甫山人津田信好による由緒書は、明治二十九年（一八九六）閉園せんとする時、園主が、大儒者柳北の石像がこのまま草野に放擲されるのは惜しいと六庵居士（飯田海山）が言うのを聞き、同じく文墨を好み風雅の道に因縁の深い貴方に贈りたいとして、柳北像は小向村から綱島村に運ばれ、飯田家邸内に安置されたのだという。

撰文の幽甫は、画家の清水硯圃門人、得庵は書家市川米庵の直孫。邸内に、同じく幽甫撰・得庵書、中島信行篆額で、飯田家の功業を顕彰した「泉田家廟之碑」がある。海山自身も書画をよくし、彼らと文雅の交りがあった。明治三十四年、俳人奥村黒市とともに津田幽甫・中島亨斎追善会を主催し、久保山墓地に幽甫の墓碑を建てた。また、海山自筆の得庵喜寿の賀辞が残っている。

三渓園の梅

小向梅林の衰微により、柳北碑は綱島の飯田家に引き取られた。一方、樹木は横浜の豪商、原三渓富太郎の庭園に移された。原が明治四十年二月十五、十六日付『横浜貿易新報』に寄せた一文によれば、往春の一日家族と小向梅林に遊んだ折、梅樹老いて実を結ぶ事少なく、畑地も必要なので、やむなく夏の終り頃に伐って薪にする予定だとの園主榎本の話に、原が「吾れ請て我園に移植し永く百歳の春を回せばや」と望み、園主も本懐と同意し、移植が実現した、これが「余が此園を営む因縁」であり、かつての行幸の余香を拝し「御幸の梅」と命名した、という。三年がかりで小向から七百本、杉田から四百本を植付け、四十一年二月二十二日、移植の完成を期し、店員・知友を招いて観梅園遊会が開かれた。その後、「御幸の梅」の幾つかは、長い歳月と、暴風や戦災の災害に耐え、復興整備された三渓園で、毎年市民に早春の訪れを告げている。

＊　＊　＊

現在、川崎市小向の地に、往時の梅林の面影を探すことは出来ない。多摩川大橋手前、御幸公園内の「明治天皇臨幸御観梅跡」碑（昭和六年建立）と、後ろの一群の梅が、昔を留めるだけだ。かつての小向梅園の柳北碑と梅の樹は、百年後のいま、飯田家と三渓園に伝えられている。

海山の長男助夫は、昭和十年（一九三五）五月の『市政春秋』誌に、同家の柳北碑の来歴と如軒の撰文とを紹介し、川崎市の有力者から柳北碑の譲渡を切望されたことがあったが、海山翁の遺志もあり現在に至っている、両市合併の暁に碑も浮かばれようと述べた。当時、同誌上で喧伝された合併論議も、立ち消えた。

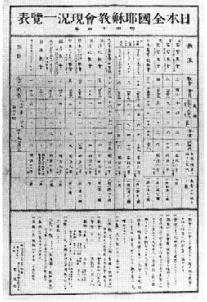
小向梅林に如軒の「梅園碑」が在ったかどうか、確認できていない。また、柳北碑が象徴する海山の文芸と交遊、文化活動をも視野に入れた地方名望家の総体の把握は、今後の課題として残っている。（佐藤孝）

閲覧室から

横浜開港資料館所蔵 聖書資料(5)

基督千年期前再臨説
夫拉古斯頓（W.E. Blackstone）著
ベイル（M.S. Vail）訳　本多武雄
校　横浜　信愛堂　明治二一・二
（一八八八）年　18cm　1冊（2・303
P）　英文書名"Jesus is Coming"
286-287P落丁　[191-3]

日本全国耶蘇教会現況一覧表
東京　原胤昭〔編・刊〕明治一四・
六（一八八一）年届　53×35cm　1
枚　[192-2]



日本全国耶蘇教会現況一覧表

耶蘇教日本全国伝道図
東京　原胤昭〔編・刊〕明治一四・
七（一八八一）年届　35×53cm　1
枚　[192-3]

使徒行伝注釈
マガービー（J.W. McGarvey）著
一信徒訳　東京　教文館　明治四三・
四（一九一〇）年　23cm　1冊（14・
12・557・2P）　[193.09-3]

路加伝　新約聖書
翻訳委員社中　横浜　米国聖書会社
明治九（一八七六）年　和装　整版
22cm　1冊（96丁）　書名は題簽に
よる　巻頭「新約聖書路加伝福音書」
[193.6-11]

新約全書〔訓点〕
横浜　米国聖書会社　明治一六（一
八八三）年　20cm　1冊（586P）
[193.5-4]

創世記　旧約聖書
横浜　米国聖書会社　明治一七（一
八八四）年　19cm　1冊（182P）
[193.2-5]

新約全書　引照
横浜　大日本聖書館　明治二四（一
八九一）年　22cm　1冊（750P）
[193.5-5]

請求番号を［　］で示しましたので、閲覧室でご覧ください。（石崎康子）

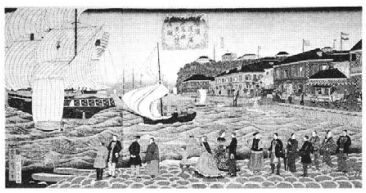
●閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室とします。
平成9年6月24日(火)～27日(金)、平成10年2月24日(火)～27日(金)
また月末整理日のため、左記の日も閲覧室は休室になります。
平成9年7月31日(木)、9月30日(火)、10月31日(金)、平成10年3月31日(火)
なお収蔵庫の燻蒸のため、5月7日(水)は休室します。
ご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

資料館だより

▼展示
（1）「横浜地図～港都横浜の生成発展を読む～」4/23(水)～8/3(日)　横浜開港資料館が所蔵する横浜鳥瞰図，絵地図，名所絵入地図，実測図，写図，都市計画図等120点ほどの資料により開港前から開港期，明治，大正，昭和期に至る港都横浜の生成発展の跡をたどります。
（2）「大正期の横浜」（仮称）　8/6(水)～10/26(日)

▼寄贈資料
（1）**大正15年5月30日発行　陸地測量部二十万分一帝国図　宇都宮ほか**　9点　及び『小学四年の学習』第2巻第1・2・3・6・8号（昭和22年）ほか　7点（戸塚区矢部町　松本喜美子氏）
（2）**書籍**　139点（中区本牧大里町　山口房枝氏）
（3）**絵葉書「金沢の風光（封）」ほか**　9種79点（港南区港南台　田所茂氏）
（4）**足立洋家文書**　79点（保土ケ谷区東川島町　足立洋氏）
（5）**幕末海防関係文書**　4点（神奈川区二ツ谷町　関根俊衛氏）
（6）**千葉一家文書**　48点（鶴見区寺谷　千葉一氏）


▲新作オリジナルジグソーパズル　三代広重画「横浜波止場ヨリ海岸通異人館之真図」1箱1,000円（本体価格）　当館・受付で販売

▼寄託資料
（1）**椎橋忠男家文書**　2,144点（港北区大豆戸町201　椎橋忠男氏）
（2）**須藤家文書**　22点（金沢区東朝比奈　須藤喜久美氏）

▼新作オリジナルジグソーパズルを発売
絵柄は三代広重画「横浜波止場ヨリ海岸通異人館之真図」で，この絵は明治初期に描かれ，波止場に中国人・西洋人・日本人が並んで，港に入るアメリカ商船をながめています。海岸通りに沿って各国商館が並び，その向うにフランス山が望まれ，国際色ゆたかな港都横浜の雰囲気をよく伝えています。

▼受付周辺が改装
このほど当館の受付周辺が装いも新たに生まれ変わりました。これまで1カ所だけだった書籍専用棚が2カ所に増え，しかもスペースを広くとったため見本が手に取り易くなりました。また，ミュージアム・グッズ専用の案内版もでき，入館者の皆さんにグッズの内容を分かり易く紹介しています。他館のポスター・コーナーも増えました。

▲改装された受付周辺